



筑紫女学園大学リポジット

New Possibilities of History and Folklore Exhibition: A Case Study of Renewal of National Museum of Japanese History and Fukuoka City Museum

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 時里, 奉明, 梶原, 宏之, TOKISATO, Noriaki, KAJIHARA, Hiroyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/461

歴史民俗展示の新たな可能性 — 国立歴史民俗博物館と福岡市博物館のリニューアルを事例に —

時 里 奉 明・梶 原 宏 之

New Possibilities of History and Folklore Exhibition : A Case Study of Renewal of National Museum of Japanese History and Fukuoka City Museum

Noriaki TOKISATO・Hiroyuki KAJIHARA

近年、歴史系の博物館で常設展示の新設やリニューアルが相次いでいる。近隣の博物館について気がついただけでも、九州歴史資料館や福岡市博物館を挙げることができる。

常設展示は、よく「博物館の顔」と称される。常設展示は当館所蔵の資料によって構成されているのがほとんどであり、当館の目的や方針がよく表現されていることによる。つまり、常設展示を見れば、当館がどんな博物館かわかるというわけである。その点、当館以外の資料によって構成されることが多く、期間限定で開催される特別展示と異なっている。

常設展示は博物館の開館以降、多少の展示替えはあるにせよ、現状のままがほとんどであった。いつ行っても同じ構成で、同じ展示品というのは、早くから賛否両論があった。常設展示が現状のままであった理由は、当館の方針、展示室の設備面、財源などさまざまな要因があるだろう。

では、全国の博物館で常設展示のリニューアルが続いているとすれば、それはどういった理由なのか、また新装なった展示を通して何を伝えようとしているのか。おそらく、博物館で開館以来の出来事が起こっているのではないだろうか。

こうした問題意識から、特別研究会では国立歴史民俗博物館(千葉県佐倉市)と福岡市博物館(福岡県福岡市)を取り上げ、歴史及び民俗の展示を調査した結果について報告した。国立歴史民俗博物館は日本の歴史と文化を展示する立場にあるのに対し、福岡市博物館は福岡の歴史と文化を展示する方針を掲げている。両館の検討を通して、中央と地方という観点から考察することも可能ではないかと思ったためである。

次に特別研究会の概要を記し、各報告について説明しておきたい。

記

- ・日 時 2014年1月21日（火）10時－12時30分 8204演習室 参加者14人
- ・内 容 歴史民俗展示の新たな可能性
—国立歴史民俗博物館と福岡市博物館のリニューアルを事例に
- ・報告者 時里奉明（本学教員）「歴史展示－近代を中心に」
梶原宏之（阿蘇たにびと博物館館長）「民俗展示－民俗の諸相」
報告のあと、質疑応答

歴史展示報告

時 里 奉 明

I 両館の概要

国立歴史民俗博物館と福岡市博物館の歴史と概要について、簡単に説明しておきたい。

①国立歴史民俗博物館〈写真1〉

国立歴史民俗博物館（以下、歴博）は、1983年千葉県佐倉市に開館した。歴博は日本の歴史と文化に関する研究を推進する目的のもと、博物館という形態をもつ大学共同利用機関として設立された。

原始・古代から順に展示室を公開していたが、開館20年を経た2004年に総合展示リニューアルの基本計画を策定し、2008年に第3展示室（近世）をリニューアル、2010



写真1 歴博（中庭）

年に第6展示室（現代）を開室、そして2013年に第4展示室（民俗）をリニューアルしている。とりわけ、2010年の第6展示室（現代）開室によって、日本の歴史と文化を原始から現代まで展示する国内唯一の機関となり、国内外に対して重要な使命を担うことになった。また2013年の第4展示室（民俗）リニューアルは、従来の展示内容を一新しており、マスコミの報道もあって注目を呼んでいる。

ここで注目すべきは、歴博は今後の学術研究の進展と社会的な要請にもとづき、総合展示を新しく構築することを明らかにしたことである。これまでも展示室を拡充したり、展示替えをしたりすることはあったが、2008年に第3展示室（近世）をリニューアルして以降、全面的な組み替えを行うことを方針にしたと言えるだろう。こうした歴博の態度は、国内の歴史系博物館に影響を与えたであろうと予想される。なお、ここで取り上げる第6展示室（現代）は、リニューアルではなく、新たに設けられたことを指摘しておきたい。

②福岡市博物館〈写真2〉

福岡市博物館（以下、市博）は、1990年に開館した。市博は福岡の歴史と民俗を研究・展示する博物館として設立された。

市博は開館して23年たった2013年に、常設展示室を初めてリニューアルしている。その前年の2012年、市博に観光としてのニーズを担うことをねらい、管轄を教育委員会から経済観光文化局へ移管している。この移管によって、常設展示室をリニューアルする財政的な目途が立ったとされている。



写真2 市博（正面）

こうして常設展示をリニューアルするにあたり、1) 新たな情報システムを導入し、2) ユニバーサル・デザインを取り入れ、3) 新しいロゴタイプとシンボルマークを定めている。報告では展示の構成や内容に重点を置いたため、以上の3点については、必要に応じて説明することにした。

Ⅱ. 歴史展示の紹介と検討—近現代展示を中心に

歴博と市博の歴史展示のうち、前者は現代展示、後者は近代展示を中心に紹介したあと、気づいたことをコメントしておきたい。

①国立歴史民俗博物館

歴博によると、「現代」は3つの異なった時代を含むとしている。1931年の満州事変から1945年の敗戦までを「戦争の時代」、1945年から1952年までの間を「占領の時代」、1955年前後を起点とし、1973年のオイルショックをへた1970年代までを「高度経済成長の時代」としている。展示の目的は、「人々の生活と文化を中心に、それぞれの時代の特徴をできるだけ多くの資料を使って多角的に描き、いまを生きる多くの方々とともに、それぞれの時代の持った意味を考えること」（第6展示室解説シート）にあった。ちなみに、「近代」は19世紀後半から1920年代までを対象とし、第5展示室になっている。

現代展示は、「戦争の時代」と「占領の時代」を合わせて『Ⅰ 戦争と平和』とし、「高度経済成長の時代」を『Ⅱ 戦後の生活革命』と2つに大別している。展示室の目次は、次の通りである。

〈写真3〉

I 戦争と平和

1. 膨張する帝国
2. 兵士の誕生
3. 銃後の生活
4. 戦場の真相
5. 占領下の生活

II 戦後の生活革命

1. 高度経済成長と生活の変貌
2. 大衆文化からみた戦後日本のイメージ



写真3 第6展示室（入口）

現代展示のおもに『I 戦争と平和』について、コメントしておこう。

第一に近代と現代に独自の時代区分を採用していることである。前述したように、歴博の近代展示は19世紀後半から1920年代まで、現代展示は1930年代から1970年代までとしている。つまり、日本の近代と現代の境目を1930年ごろに設定しているのがユニークである。

日本史の場合、近代と現代を1945年の敗戦前後に配置するのが通常である。また世界史では1914年から18年まで続いた第一次世界大戦を近代と現代の分岐点としていることが多い。つまり、前者はアジア太平洋戦争、後者は第一次世界大戦、それぞれ戦争という出来事を指標としている。

それらに対し、歴博はなぜそうした区分になっているのだろうか。もっとも、歴博の現代展示は、1930年代以降を対象としながら、昭和期の戦争を理解するために、明治期の日清戦争、日露戦争、大正期の第一次世界大戦を展示している。つまり、現代展示は1930年代以降と年代で区切りながら近代の戦争というテーマを扱っているのが、時代区分がわかりにくくなっている。

第二に研究状況の影響が展示に表れていることである。従来の戦争史研究はもっぱら政治と軍事が中心であったが、近年は社会や民衆に対する分析が進んでいる。ここで特筆すべきは、そうした研究成果をもとに、兵士の誕生、地域社会との関係、実際の戦場を佐倉連隊を事例として展示していることだろう。佐倉連隊兵舎（模型）と同兵舎の内務班（実物大再現、写真4）、映画



写真4 佐倉連隊兵舎の内務班

『真空地帯』（映像、旧佐倉兵舎で撮影）などの展示資料は、具体的であるために、現実感をもって受け止めることができるように思われる。歴博の場所はもともと佐倉城跡で、明治以降は佐倉連隊の兵舎があった。展示資料は実物が中心になっているが、模型、再現、さらには音声〈写真5〉、映像などバラエティに富んでいる。佐倉連隊という個別の軍隊を取り上げて日本の戦争を展示することに異論はあるようだが、その

試みは評価できる。

ほかにも歴博の戦争展示について、政治や軍事が背景になっており、さらに経済は薄いといった指摘がみられる。政治や軍事、そして経済の研究成果をどのように展示に反映させるのか、また社会や生活とそれらに関連づけた展示をどのように構成するかは、これからの課題となるだろう。

第三に全体を見て気になったのは、時間の流れを展示室単位で区切っていることである。展示室ごとに見ることができる利点がある反面、展示室ごとに完結している印象を与える。各展示室の独立性が強くなるため、歴史を時間の流れで理解しようとする、やや難しい構成になっていると思われる。



写真5 軍隊ラッパ

②福岡市博物館

市博は「FUKUOKA アジアに生きた都市と人びと」というタイトルで、アジア諸地域との人・もの・文化の交流がつくってきた地域の特色ある歴史と、そこに生きる人々の暮らしを紹介している。常設展示は「金印」と「山笠」を目玉として取り上げ、全体を11のコーナーに区分し、全体を通して見学できるように一筆書きの動線を採用している。

各コーナーのはじめには「時の標」という道しるべを設置して、平面図、見出し、解説、年表などの情報を提供し、子供向けに「えきけん先生」(貝原益軒)と「なんめい君」(亀井南冥)というキャラクターによるミニ・シアターを上映している。例として、「8 近代都市・福岡の時代」



写真6 8コーナーの「時の標」



写真7 ゴンドラに乗って解説

の「時の標」とキャラクターの写真を挙げておこう〈写真6、7〉。

11のコーナータイトルは次の通りである。

- 1 金印の世界
- 2 福岡のあけぼの（旧石器時代－縄文時代）
- 3 奴国の時代（弥生時代）
- 4 鴻臚館の時代（古墳時代・奈良時代・平安時代前期）
- 5 博多綱首の時代（平安時代後期・鎌倉時代）
- 6 博多豪商の時代（南北朝時代・室町時代・戦国時代）
- 7 福岡藩の時代（江戸時代）
- 8 近代都市・福岡の時代（明治時代・大正時代・昭和時代）
- 9 現代の福岡（昭和時代）
- 10 福博人生（民俗）
- 11 山笠の世界

今回のリニューアル展示について、そのポイントを全体と近現代に分けて説明したい。

まず11のコーナーは既存の時代区分にもとづくことなく、独自の区分を採用していることである。これは先述した11のコーナータイトルを見れば、自ずと明らかだろう。とりわけ旧石器時代から戦国時代に至る1から6のコーナーは、一般的な日本の歴史とは異なる福岡の個性的な歩み確かめることができる。

次にデジタルデバイスの導入に意欲的なことである。インタラクティブシステムやプロジェクトンマッピング、そしてAR（拡張現実）を活用している。

たとえば、モニター画像に触れて、金印を前後左右に動かしたり、サイズを変えたり、さまざまな角度から鑑賞することができる〈写真8〉。筆者はいつも展示ケースにできるだけ顔を近づけ、食い入るように見ていた。それでも目に入る姿は小さく、金印そのものの知識や情報はなかなか手にすることができなかった。ところが、金印の画像を大きくしてぐるぐる回すと、文字の形がはっきりわかる、つまみの蛇がよく



写真8 金印の画像

見えるなど驚きの連続であった。今まで展示ケースの向こうでどうすることもできなかったのに、取り扱いができる身近な存在になった気がする。このシステムの効果は計り知れない。

さらに蒙古襲来絵詞では、元軍が武器として用いた「てつほう」が画像のなかで破裂するだけでなく、その音を聞くことができる。アロー号（現存最古の国産自動車）にタブレットを向ける

と、イラストで描かれた福岡の名所を疾走する姿を見ることができる。デジタルデバイスの活用は、見学者に新たな楽しみをもたらし、理解を深めるのに役立つだろう。

8 コーナーの近代展示は、「明治維新と福岡」「近代都市の建設」「福岡大空襲と戦後復興」の3区分、9 コーナーの現代展示は、「高度経済成長の時代」「進化を続ける福岡市」の2区分になっている。福岡の街がたびたび開催された共進会や博覧会に



写真9 東中洲の町並み

よって近代都市へと変貌し、さらに高度経済成長を経て膨張を続けていることを中心に構成されている。博覧会をきっかけとして、福岡の市街地や交通網が整備され、近代化していく様子が見てとれる。なかでも1930年代の東中洲の町並みを模型で再現した展示は〈写真9〉、アロー号やカフェ・デュ・ミュゼとともに、当時花開いたモダンな様子を伝えている。このカフェは、1934年に開店したブラジレイロを参考に、当時の雰囲気を実物大で再現している。

最も注目したいのは、近現代展示（8と9のコーナー）と民俗展示（10コーナー）の乗り入れを試みていることである。民俗展示で架空の四世代家族を設定し、世代をさかのぼることによって、近現代展示との接点を見いだしている。たとえば、福岡で生まれ育った最も若い世代の男性は、1989年に開催されたアジア太平洋博覧会（よかトピア）で妻となる女性と出会って結婚したという設定になっている。その男性の父親は東中洲の町並み再現展示のところで、今は廃止されてしまった路面電車の思い出について語っているといた具合である。

博物館における民俗展示と近現代展示は所々で重なっていたが、全体を通して展示することが難しく、別々に展示していた。そもそも民俗学と歴史学といった学問分野の違いにもとづいている。近現代という時代をそれぞれの世代の経験に関連づけて展示しているのは興味深い。見学者は福岡（街）の歴史と、家族（世代）の歴史を重ね合わせながら、展示に向かうことができるだろう。ただ気になるのは、とくに民俗展示は架空の四世代を設定しているため、そう長い間展示することはできないことである。もっともこうした設定は、しかるべき時に展示をリニューアルすることを前提にしているのであろう。

近代展示について、いくつかコメントしておきたい。前述したように、近代展示は、福岡の街が何回かの共進会や博覧会の開催によって近代都市へと変わっていく姿を描いている。1927年に開催された東亜勸業博覧会は、当時の福岡市人口の10倍に当たる160万人の入場者を集め、地方の博覧会として成功を収めている。これを機に路面電車が拡張され、跡地は大濠公園に整備されるなど、福岡の近代化が進んでいる。この博覧会は、「東亜」という名称にあるように、日本を含んだ東アジア各国の品々を品評する催しであった。ただし、この展示を含めても、アジアと関連した展示が少ないように思われる。明らかなのは、1989年のアジア太平洋博覧会である。あと

は戦後になって、博多港が引き揚げ者の拠点になったことくらいだろうか。市博はアジア地域との交流の歴史をタイトルに含んでいるので、これとの関連は気になるところである。

アジアとの関連で言うと、福岡の政治（思想）をいかに展示するかは、これからの課題となるだろう。たとえば福岡の政界に大きな影響力をもった玄洋社は、自由民権運動を出発点とし、政府の進める外交政策に反対しつつ、朝鮮や中国との関係を深め、大アジア主義の路線を進んでいく。こうした政治性は、朝鮮半島や中国大陸に近いという地理的な関係もあって、当時の日本で特異な立場にあったと思われる。

なお福岡市では2004年より『新修 福岡市史』の編さん事業を開始している。この目的は、「福岡の歴史とそこに暮らす人々の歩みを描く」ことにある。こうした市史編さんの目的と市博の方針が、ほぼ重なっていることはことさら言うまでもないだろう。市史編さんの成果をいかにして展示に反映させるのか、そうした取り組みを期待したい。

Ⅲ. 今後の歴史展示

両館の歴史展示についてまとめながら、展望を述べておこう。

第一に両館とも歴史研究の成果を展示に活かし続ける方針を採用していることである。今までは研究が進み、社会的な状況が変わっても、展示をリニューアルすることはあまりなかったように思われる。研究の成果が博物館の展示として公表されると考えるならば、その社会的な影響は大きい。そこから研究者と見学者とを結ぶ機会も生じてくるだろう。

第二に著名な資料や文化財などの展示品があまりないことである。とくに両館の近現代展示は、そうした印象を受けた。目立った展示品がないということは、展示の構成そのものに重きを置いているということでもある。というより、多くの人にとって関心をもつことができるテーマを設定していると言える。歴博は館の方針として、市博は近現代と民俗を合わせてではあるが、人々の生活と文化を中心とする展示が構成されている。こうした両館の展示方針を確認することができるだろう。

第三に展示を理解するための工夫が進んでいることである。資料の種類も、実物をはじめ音声や映像にいたるまで多彩である。実際に資料を手を持つなど体感できるものも多い。さらに最新の情報機器を導入し、展示を五感で理解する仕掛けをつくっている。

最後に人々があるまとまった歴史像に接する機会や場所は限られているだろう。それがどのような歴史像だとしてもである。そうだとすると、博物館の歴史展示は人々に歴史像を提供する大切な役割を果たしている。

たとえば、戦争展示はこれから意図せずとも重要になってくるだろう。戦争を知っている、経験している人は近いうちにいなくなってしまう。戦争を知らない人たち、経験したことの無い人たちに何をどのように伝えたらよいのか。博物館は戦争展示を通して、人々の戦争観や戦争イメージの形成に大切な役割を担うことになるに違いない。実際にそうした試みは、全国いたるところ

で起こっている。博物館、とくに歴史系の博物館のこれからを楽しみにしたい。

【付記】

国立歴史民俗博物館では葉山茂氏及び渡部鮎美氏、福岡市博物館では野島義敬氏にお世話になった。記して、感謝申し上げたい。

〈参考資料〉

- ・両館のホームページ、パンフレットなど各種資料
- ・村上義彦『博物館の歴史展示の実際』（雄山閣、1992年）
- ・国立歴史民俗博物館編『歴史展示とは何か』（アム・プロモーション、2003年）
- ・国立歴史民俗博物館編『歴史展示のメッセージ』（アム・プロモーション、2004年）
- ・一ノ瀬俊也『国立歴史民俗博物館における戦争展示をめぐって』（『地歴・公民科資料』63号、2006年）
- ・国立歴史民俗博物館・安田常雄編『歴博フォーラム 戦争と平和 総合展示第6室〈現代〉の世界1』（東京堂出版、2010年）
- ・福岡市博物館学芸課編『FUKUOKA アジアに生きた都市と人びと』（福岡市博物館、2013年）

（ときさと のりあき：日本語・日本文学科 教授）

第四世代博物館における新しい民俗展示の研究

梶原 宏之

I. はじめに

平成の市町村合併を契機に文化財行政が再編成されるなかで、新しい博物館像が模索されるようになった。合併前までそれぞれの町村が持っていた歴史民俗資料館等を、合併後も継続してすべて個別に維持するか、それとも統廃合して新しい博物館を建設するかが議論の俎上に上がっている¹⁾。どちらを選択してもこれから膨大な予算が必要となるため、結論は簡単なことではない。博物館とは何のためにあるのか、なぜつくらねばならないのかという古典的な問題が、いま再び問われている。

もちろん、つくり直すにしても、旧態依然のハコモノでは市民の納得は得られまい。できうる限り最新鋭の展示技術を投入し、新生市町村の未来を予感させるようなものが望ましい。博物館には、情報の収集保存・調査研究・普及教育という3つの大きな業務がある。3つとも大切な事業であるが、収集保存のみに力を入れれば「博物館行き」と揶揄され、調査研究のみに力を入れれば市民に開かれていないと批判されるため、普及教育を如何に工夫するかが現代博物館の命題となっているが、しかしより良い普及教育のためにはもちろん収集保存や調査研究がしっかりしていなくてはならないことが前提である。そうでなくては、やがて活動の種も尽きてしまう。よって限られた予算の中でこれらすべてをバランスよく配置し、かつ話題性を持った最新鋭の技術や理論も投入することが期待されているわけで、大変厳しい現状であることは間違いないが、しかしこれをクリアしなければ新しい博物館も生まれぬ。

新しい博物館とは何か。夭折の博物館学者・伊藤寿朗元東京学芸大助教授が、日本の博物館史を機能的に3つに分類した世代論がよく知られている(表1)。伊藤によれば、わが国における博物館の第一世代は蒐集家による収集が中心的なテーマであった時代であり、モノの収集にとにかく力を入れる〈保存志向〉型であった。次いで第二世代になると、行政が博物館運営に乗り出し、収集保存した資料を展示する〈公開志向〉型となってくる。税金で運営される行政立の博物館が、その成果を市民に公開するのは当然であるが、現在多くの人々が博物館に対して抱いている一般的なイメージ、すなわち静かな館内で古い資料が展示ケースに飾ってあり、それを眺めながら進むという印象はこの世代が生んだものといえよう。そして伊藤はさらに第三世代として、行政だ

けでなく市民が博物館運営に参画する未来像を描いている。ここで博物館は〈参加志向〉型となり、市民は博物館情報の単なる受け身でなく、自ら率先して博物館運営に参加する主体となる。今でこそ参加体験というキーワードはむしろ珍しくないが、伊藤が亡くなった1991年当時はまだ少なく、伊藤自身も「第三世代とは期待概念であり、典型となる博物館はまだない」と述べていた²⁾。しかし現在、新しい博物館像を考える上で、市民参加の視点が欠かせないのは最初に述べた通りである。

表1 三つの世代の博物館像

項目	第一世代	第二世代	第三世代
目的	保存志向	公開志向	参加志向
設立の理由	宝物の保存施設	町のシンボル、コレクション寄贈	地域社会の要請
利用の形態	娯楽、観光	一過性の見学	継続的な活用
専門職員	番人	孤独な学芸員	専門職集団
建物	倉庫中心	展示室中心	事業中心
調査・研究	やらない	学芸員の個人的興味と関心の範囲	社会的要請に応えた調査・研究、市民との共同調査
収集・保管	開館したときのまま	なんでも集めておく	新しい価値を発見しながら集める
展示のかたち	常設展のみ	常設展と特別展	参加・体験型の展示
展示の内容	単品の価値中心	テーマ中心、AV機器の活用	資料の多様な見方を可能にする、観察力の育成
教育事業	ない	一過性の事業	継続的な事業
教育事業担当者	ない	学芸員、臨時雇用コンパニオン	教育事業担当（エデュケーター）
友の会	ない	よくやるが参加者は受身（受益者団体化）	一定期間を経たら自主グループへの独立をうながす
運営	孤立・悠々自適（関係者だけが対象）	啓蒙的アピール（世間の無理解を嘆く）	対社会的メッセージ（社会的存在を主張）
博物館協議会	ない	文化財関係者を中心とした年数回の顔合わせ	市民代表の参加と権限の行使を保障
休憩所	便所だけ	ソファと灰皿程度	レストラン、喫茶室
売店	ない	受付を兼ねた、絵ハガキと売れ残り図録程度	専門書をはじめ充実したミュージアム・ショップ

（伊藤1993より抜粋して作成）

各世代は前世代を批判的に継承しながらも、第一世代・第二世代・第三世代のどれが優れてどれがそうでないという話ではない。伊藤が示したキーワード、すなわち〈保存〉〈公開〉〈参加〉という3つの流れは、現代博物館の3つの業務である収集保存・調査研究・普及教育とそのまま重なる部分も大きい。つまりわが国の博物館は、こうした進化をとげながら、現在そのすべてを博物館が持つ機能として包含しているといえる。そして伊藤の死後、博物館関係者のあいだで、

ポスト第三世代、あるいは第四世代とも呼ばれる博物館像が現れてきた³⁾。伊藤の死後であるため定義はされていないが、これまでの博物館像におさまらないもの、もはや博物館と名もついていないが博物館的な機能を持つもの、商業スペースにオープンされる何々ミュージアムと名付けられる空間、イベント的な要素が強いけれどもきちんとした調査研究の成果も展示されているものなどがそれにあたる⁴⁾。わざわざ博物館と言わなくとも、私たちが暮らす空間を見渡せば、樹木や野の花には名前プレートがあちこちつけられており、史跡名所には詳しい解説板が立てられている。いわば博物館機能は街中に拡張しているのであり、街全体を博物館とすれば、わざわざ大金をかけて巨大なハコモノを作る必要もなくなる。新しい博物館建設の議論は、こうした状況も鑑みた上でなされる必要がある。つまり、建物建設にかかる費用は極力抑えながら、地域全体を博物館として如何に有機的にかかわれるかの仕組みづくりも必要となる。

もうひとつ、これまでに比べ、新しい博物館に求められているものは楽しさである。旧来の博物館はどちらかというと荘厳な収集保存機関であり、調査研究機関であった。参加体験がキーワードとなってからも、それはいわば研究の余暇と考える学芸員もいた。ましてや商売となると、これを忌避する研究者は少なくなかった。そのため同じ博物館の敷地内であっても、レストランやミュージアムショップ部門は別経営であり、研究者はお金を触らぬ場所にいたのである。ただし、民間の博物館であればその辺りも弾力的に運営されている現状を踏まえれば、これはわが国の博物館が多く行政立であった問題ともいえようが、いずれにせよ、訪れる市民の側からみれば、これからの博物館は調査研究機関のみならず、如何に市民に楽しみを与えられるサービス機関であるかが求められるだろう。博物館はあらゆる手段を駆使して市民の知的好奇心を刺戟し、それに応えられる場であることが期待される。よって筆者は、伊藤亡きあとの第四世代博物館像は〈サービス志向〉型であろうとみている。博物館がサービス機関であるという意識改革に成功できるかどうか新しい博物館改革の試金石ともなるが、しかしそれもしっかりした収集保存業務および調査研究業務に裏付けされたものでなければならぬのは先述の通りである。

こうしたわが国の博物館状況をふまえ、本論ではまず、昨今大きなリニューアルで話題を呼んだ2つの博物館を取り上げる。一つは千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館（歴博、1983年開館）、もう一つは福岡県の福岡市博物館（福岡市博、1990年開館）である。共に開館以来初めて常設展がリニューアルされその動向が注目された博物館であり、また共に民俗展示室を独自に有するため調査の対象とした。ついで、その両者の調査を通して気がついたいくつかの課題のうち、特に新しいデジタルデバイスの活用についてと、展示室外での活動、博物館の世界でアウトリーチ活動とも呼ばれてきた領域について考察を加える。これらはいわば目に見えない資料をどう可視化するかというものであり、ユネスコ無形文化遺産など昨今話題となっているインタンジブルな文化財（無形文化）をどう扱うかという問題にもつながるが、元来民俗学が得意としてきた領域である。これらの検討を通して、わが国の新しい博物館運営における議論に資したいと考える。

Ⅱ. 歴博と福岡市博のリニューアル

国立歴史民俗博物館（歴博、図1）の開館は1983年。全体の展示室構成は6つあり、第一展示室が原始古代、第二展示室が中世、第三展示室が近世ときて、第四展示室に民俗が入っている。そして近現代はその後の第五展示室および第六展示室に来ており、民俗展示が歴史展示に挟まれる珍しい構成をしているが、これは国立の博物館として近現代展示に難航したことが原因の一つ



図1 国立歴史民俗博物館

とされる（一ノ瀬2010）。開館以降、近代展示のうち前半の「文明開化」展示が完成したのがようやく1993年、後半の「産業の開拓」および「都市の大衆の時代」展示が完成したのが1995年であり、戦争展示を含む第六展示室がついに完成したのは2010年3月16日、開館から27年経ってである。その間に民俗展示が先に入ったため、結果として民俗展示が歴史展示に挟まれる形となった。第五展示室および第六展示室の完成は、言い換えれば博

物館の歴史展示においてようやく戦争が展示対象として取組めるようになったことを表し、歴博においてはアイヌ民族や朝鮮民族の問題を取り上げながら、一方で日清戦争や日露戦争は取り上げられないなどの課題もみられるのだが、民俗展示に関する問題を主題とする本論では一旦考察から外すこととする。

民俗展示のリニューアルは2013年3月19日、開館以来32年経ってのことである。今回リニューアルされたのは、この30年のあいだに日本社会が大きく変わり、それに呼応して日本民俗学の成果も大きく変化したためとされる。展示室全体のテーマは「日本人の民俗世界」から「列島の民俗文化」へ設定変更され、「民俗」へのまなざし・おそれと祈り・くらしと技、という3コーナーに再構成された。まず入口のコーナーで目を引いたのは全国のおせち料理のきらびやかな展示で、民俗へのまなざしに対する導入としては有意なアプローチであると感じた（残念ながら写真撮影は禁止であった）。全国都道府県ごとのおせち料理を並べるだけならば旧来の民俗展示となんら変わるものではないが、興味深かったのはそうした都道府県ごとの地図に落とせないおせち料理が、すでにこの国の都市文化として定着していることである。具体的には、有名老舗デパートやインターネットで毎年おせち料理の注文が取られるようになり、人々は正月に舌鼓を打っているが、それらは全国地図に落とそうと思っても落とせない。地域性というものがあそうでしかし欠如しているからである。現代民俗学はこうした地域性なき民俗文化や消費文化、あるいはフォークロリズムといった課題にどういふまなざしを向けられるかの問題提起として楽しむことができた。また、白神山地のマタギ展示も、世界遺産登録の問題ともからめて現代社会と民俗学を考えるよいテーマを提示しているように感じられた。

ついでおそれと祈りのコーナーは民俗学が最も好む心象心意を扱うものだが、神々と祭り・妖



図2 しぐさと呪文展示（国立歴史民俗博物館）

怪・まじない・生と死などの人生儀礼は来館者にも大変興味をひくテーマであるものの、モノのない無形文化のため博物館としては展示が難しい。それをどう展示できるか関心を持って観覧したが、たとえばしぐさと呪文の展示ではマネキンを使ったいわば印相展示が（図2）、また妖怪についてはデジタルデバイスを用いた展示もみられた。単なる民具の羅列からどう展示を再構成できるかという課題は全国の博物館が共通して抱える

ものだが、歴博においても高度経済成長期以降の同時代文化を積極的に取り込む姿勢が見られた。これは昨今いわゆる昭和レトロ展示などと呼ばれる時流にも共通するが、「共感」を介した民俗展示の得意とするところであろう。なお、デジタルデバイスについては次章で扱うこととする。

最後のくらしと技のコーナーは、生業研究や職人・商人研究などの成果が展示されているが、近江西物部（滋賀県長浜市高月町）の集落や山林をまるごと再現したジオラマや映像の複合展示がみられた（図3）。ここでも単に鍬や犁といった民具を展示するのではなく、そうした文化がどのような自然環境のなかで生み出され営まれてきたのかを総合的に示そうとする姿勢が感じられた⁵⁾。最初のコーナーでのマタギ展示もそうであったが、新しい博物館は単なる学問的縦割りで展示室が構成されるものではない⁶⁾。人文科学である民俗学が、自然科学の叡智もあわせて現代社会の問題にアプローチする姿も新しい期待であろう。



図3 近江西物部集落展示(国立歴史民俗博物館)

ユーラシア大陸からつらなるこの国の民俗文化を列島という視点からとらえなおす姿勢は、まさに今回の全体テーマの変更が志向するところである。

一方、福岡市博物館（福岡市博）が開館したのは1990年。その前年に市制100周年を記念して百道浜で開かれたアジア太平洋博覧会（通称よかトピア）閉幕後に、パピリオンの1つを改修して市立博物館としたものである。今回のリニューアル（2013年11月3日）はそれ以来であるから、こちらの民俗展示も開館以来23年ぶりのリニューアルとなる。

福岡市博が常設展をリニューアルさせた背景は、歴博と同じく経年的な理由もあるが、市役所内部での変化も大きい。福岡市は2010年に史上最少年の若さで初当選した高島宗一郎を筆頭に市役所内部の改組が進められ⁷⁾、2012年に経済観光文化局というセクションが創設された。ここに、産業振興部や国際経済・コンテンツ部、観光コンベンション部、空港対策部などと共に、博物館や美術館、アジア美術館、文化財部なども一緒に入ることになったのである。これまで教育委員会が所管していた市立博物館や美術館にとって大きな変化となり、戸惑いもみられたが⁸⁾、新た

な風が入り期待が寄せられることで「新しいニーズを意識するように」なったとされる（福岡市資料）。これは福岡市における文化行政ストラテジーの明確な変更であり、いわば守りの姿勢から攻めの姿勢へと発想を転換したことを意味する。新たな試みのため未だ問題や試行錯誤も重ねていようが、今後どう展開するかが注目される⁹⁾。

福岡市博の常設展フロアはすべて改装され、全部で11のコーナーに再整理された。すなわち、①金印の世界、②福岡のあけぼの、③奴国の時代、④鴻臚館の時代、⑤博多綱首の時代、⑥博多豪商の時代、⑦福岡藩の時代、⑧近代都市福岡の時代、⑨現代の福岡、⑩福博人生、⑪山笠の世界、である。このうち①～⑨が歴史展示、⑩と⑪が民俗展示である。改装以前、福岡市博は特に目立たせるコア的空間を持たず、動線も設定していなかった。しかし今回のリニューアルでは、福岡市が誇る2つの資料について大きく空間を割くことにした。それが金印と山笠である。金印展示をめぐる様々な試みも調査でうかがえ興味深かったが、歴史展示資料であるため、本論では一旦考察から外すこととする。

⑩の山笠の展示で特に興味深かったのは、ARというデジタルデバイスを用いた新しい展示の導入であった。これについては次章で詳しく述べることにしたい。総体的な民俗展示としては⑩の福博人生が中心になるが、ここでまず興味深かったのは、今回福岡市博が架空の4世代家族を



図4 福博人生による世代展示（福岡市博物館）

設定して展示を組み立てていることである（図4）。博物館において、歴史展示は旧石器時代から縄文弥生と続き、古代・中世・近世と年表順に展示される通史展示が一般的だが、民俗展示はそうした一般的なスタイルを持たない。生業・衣食住・年中行事といったテーマごとに展示コーナーを設定している施設もあれば、春夏秋冬と季節の順に通季展示をしている施設もある。しかし今回福岡市博は、祖父の世代・親の世代・子の世代・

孫の世代の4世代を設定し、孫から祖父の世代にかけて順々とみてゆく動線を描いている。⑩の山笠の展示ともリンクさせ、まず孫が山笠の昇き山に足が届かず苦戦する姿から福岡の「一人前」を示し、ついで子や親の世代がこの地でどう暮らし、関東地方との結婚文化の相違からカルチャーショックに陥るなどのユニークな展示が続く。そして最後には祖父が亡くなり、初盆に山笠の昇き手たちが見舞いに訪れるという場面で終わる。民俗展示であるが、人間の一生を通した通史展示にもなっており、それでいて人生儀礼や社会組織といった民俗学的要素も適宜挿入されている。また、近代史展示で用いられている様々なジオラマを活用し、母親は東京から福岡の大学に進学し、アジア太平洋博覧会でアルバイトをしたときに父親と出会ったなど、設定の巧妙さにも感心させられた。一本の動線を描きながら、最初に来たときには歴史展示であったジオラマが、次にぐるりと回って反対側から眺めたときに民俗展示となるなどの工夫は、これまでの歴史民俗展示ではあまり見かけず¹⁰⁾、限られた予算で一つの展示を何度も活用するという点でも優れた試みと

思われる。こうした工夫が、少なくとも3ヶ所で見受けられた(図5)。また逆に残念に感じた点は、アジアに関する展示が、歴史展示までは盛んにみられながら、民俗展示に入った途端にまったくみられなくなることである。福岡市博の館全体のテーマは「FUKUOKA アジアに生きた都市と人びと」であるし、福岡市はアジアからの訪問客も多いため、アジアに生きた都市と人びとの民俗文化も展示して、比較しても有意と思われる。



図5 中洲ジオラマ展示(福岡市博物館)
向かい側から近現代展示、手前側から民俗展示となる。奥は昭和初期のカフェ。

Ⅲ. 新しいデジタル機器の活用

新しい博物館の展示方法、特に映像機器を用いたものも検討してみよう。今回のリニューアルにおいては、インタラクティブ映像、プロジェクションマッピング、AR(拡張現実)の3つを新しい取り組みとして確認することができた。インタラクティブ映像は、来館者が直接モニター画面に触れて自由に情報を操作できる技術で、たとえば福岡市博の金印展示や、蒙古襲来絵詞展示などに活用されている(インタラクティブとは、情報が一方向にではなく、双方向に扱うことができるものをいう)。金印は実物を360度全方位撮影したもので、タッチパネルに触れることで資料を自由自在に回転して見ることができる。倍率も変えられるため、実際よりかなり大きく、金印の細部まで観察することができる。360度全方位撮影は新しい技術ではなく、2000年前後よりみられたが¹¹⁾、今回はそれをタッチパネルで再生することで操作性を向上させている。博物館ではスイッチボタン式のモニター展示が長いあいだ使われてきたが、子どもたちの悪戯もあり壊れやすいのが問題であった。しかしこれならばすぐに壊れることはない。なお、福岡市博の金印大画面モニターは、指で押された画面の位置を電圧変化により認識する抵抗膜方式ではなく、左右に仕掛けられた赤外線センサーで指の座標をとらえ、三角測量により位置を検出する光学方式



図6 蒙古襲来絵詞展示装置
(画像は著作権保護のため加工)

を採用しているようだ。福岡市博の蒙古襲来絵詞展示は、同じくタッチパネルに触れることで絵巻物を自由にたぐることができるインタラクティブな展示だ。これまでの絵巻物展示は、巻物を展示ケースに入れ、開いて文鎮で押さえた部分のみしか閲覧できなかったが、これですべての部分を見ることができるようになった。さらにたとえば有名な竹崎季長と「てつはう」部分で破裂音も出せるほか、画面上に自由にキャプションを出すこと

もできる（図6）。英語など外国語表記もワンタッチで切り替えられる。歴博においても、たとえば狩野洞雲の百鬼夜行図巻物がモニター上で見られるよう用意されていて、拡大縮小も自由にできるが、ただしこちらは画面上の矢印部分をタッチすることで左右へ動かす仕様になっている。

ジオラマは博物館展示において場所も予算もかかるものであり、それだけに作ってただ置いておくだけならば残念なことである。しかし前章でみた通り、福岡市博では動線を新たに設定し、近現代史から民俗展示へ移動する際に、最初は近現代史資料として見たジオラマが、今度は逆方向から民俗資料としても見られるよう工夫されていた。さらに福岡市博では、このジオラマにプロジェクターからの投影を重ね合わせることで、新たな情報を付加して来館者たちに提示できる工夫もみられた。福岡市のジオラマ上部にプロジェクターを設置し、手前のボタンを押せばそれがどこにあるのか光線でガイドしてくれるのみならず、実際にはそこにはない情報、たとえば福



図7 福岡市ジオラマ展示（福岡市博物館）福岡城趾の上に五稜郭をマッピングしている。

岡城趾の上に大阪城や五稜郭、紫禁城といった大きさの光線を投影することもできる（図7）。この操作により、来館者は自らが知るものの大きさと比較しながら学ぶことができるのである。実際の五稜郭などの映像は正面のモニターに映し出される。一般の平坦なスクリーンではなく、実際の物体や空間、建物などにプロジェクターを用いてCG映像を投影する技術やアート作品をプロジェクションマッピングという。博物館の世界においても最新の技術というわけではないが¹²⁾、ジオラ

マの有効活用という点からみて福岡市博の試みは意欲的といえよう。歴博にもこうした技術が導入されることを期待したい。

今回のリニューアルのなかで技術的に最も興味をもって調査したのは、福岡市博が導入したAR展示である。ARとは拡張現実（Augmented Reality）の頭文字で¹³⁾、仮想現実（Virtual Reality）であるVRと対比してとらえられる。たとえばパソコンのモニター上でGoogleストリートビューにより旅する気持ちになるなど、ヴァーチャルなもの（この場合はモニター）の上に情報をのせる仮想体験技術がVRなのに対し、ARは実際に目の前にあるリアルな事物に情報をのせる技術である。たとえばARでは実際に街を歩いていて、目の前に見える事物に情報を重畳させて見ることができる。ただし肉眼では情報は見えないため、それを映し出すためのデジタルデバイスがあいだに必要となる。たとえばいま米国で先行販売され話題を呼んでいるGoogle Glassや、エプソン社のMOVERIOシリーズなどがウェアラブルデバイスとして注目されている。福岡市博の場合はウェアラブルではなく、受付でタブレット端末を貸し出し、それを展示資料にかざすことで情報を重畳させる¹⁴⁾。

今回福岡市博で体験することのできたAR展示は6点、ナウマン象・甕棺発掘・遣唐使船・福博惣図・アロー号・山笠であるが、このうち実際の意味でAR技術の正しい活用となっているの

は福博惣図と山笠の2つである（そのほかは重畳される情報が本物ではないため、いわばAR技術を利用した遊びといった趣向のものである）。特に民俗展示として注目したのは山笠で、結論



図8 山笠AR展示（福岡市博物館）

から言えばこれは大変将来性のある技術と感じられた。祭り展示において、神輿を展示するのはごく普通だが、ただ置いただけでは祭りの臨場感は伝わってこない。そこで多くの博物館では映像モニターを置き、実際の祭りの様子を映すことでそれを補ってきたのだが、AR技術を用いれば、展示している舁き山そのものを、まるで動いているように見せることができる。実際にはそこにいない舁き手たちが登場し、威勢の良い掛け声と共に

舁き山が動き出すのである（図8）。

将来性があると感じられたのは、ARの技術についてだけではない。博物館の未来のありかたについても感じられたからだ。今回は、博物館の建物内部でこの技術を用いたが、逆に使えば、実際の博多の街に山笠のほうを出現させることができる。つまり今回福岡市博は山笠にデバイスをかざして街中を再現したが、街中で使えばそこに山笠を再現できる。これが意味するところは大きい。いわば街中が博物館になるのである。祭りだけではない。植物展示も、たとえば春の花を別の季節にその場で咲かせることができるし、動物展示も、かつて生存した生きものをそこに蘇らせることができる。歴史展示も考古展示も同じである。民俗展示でいえば、話者の記憶をいつまでも彼ら自身の語りと共にその場所で再現することもできる。ARはまだ未開発の技術であり、物足りない点も多いが、特に無形文化を扱う民俗展示においてこの技術がもたらす恩恵は将来とても大きいものになるだろう。こうしたフィールドミュージアムの姿は、新しい第四世代博物館の姿とも重畳してみえる。

IV. 新しい教育普及活動

特に第三世代以降の博物館では、博物館の活動そのものが徐々にハコモノを飛び出しつつある。博物館の3大業務は収集保存・調査研究・普及教育と述べたが、普及教育の方法にたとえばワークショップや自然観察会があったり、あるいは講演会や上映会などの方法もとれるが、そのうちの一つに展示ケースによる展覧という手法もあるだけである。つまり、展示ケースも含めたあらゆる博物館の活動が本来普及教育活動なのであり、展示活動と教育普及活動を分けて考える必要はない。従来アウトリーチ活動と呼ばれた博物館建物の外へ出てゆく出張活動も、第四世代博物館では付加的なものではなく、最初から活動の主たるものとして総体的に検討されるだろう。

博物館はモノを集める場所ではあるが、本当に大切なものはそのモノにまつわる情報であり、ゆえに博物館は実際には博情館であると述べたのは国立民族学博物館初代館長の梅棹忠夫である

(梅棹1988)。博物館の本質をついた卓見であり、第四世代博物館像にも共通するものといえようが、博物館が収集保存した〈情報〉を調査研究し、その成果をどう普及教育してゆくか、これからあらゆる手段が検討されねばならない。

そう考えたとき、入場料を支払って入る展示室だけでなく、博物館内にあるあらゆる空間、すなわちワークショップルームや体験学習室、図書室、ミュージアムショップなどはもちろん、ミュージアムレストランやトイレに至るまで、すべてが博物館情報の普及教育の場となりえることが分かる。さらに館内のみならず、フィールドミュージアムの機能を取り入れた第四世代博物館では、街中が博物館となり、施設はそのコアとして活用されよう¹⁵⁾。

今回リニューアルされた歴博でも福岡市博でも、共にこうした参加体験型の部屋を独自に設けており、積極的に取り組む姿勢がうかがわれた。歴博では「たいけんれきはく」と題し、きものぬりえ・きものの模様・中世の食事・この行列なんじゃいな・江戸の町のパズルの5種が、専門



図9 みたいけんラボ（福岡市博物館）

担当職員の指導のもとに体験学習できるよう準備されている。福岡市博でも「みたいけんラボ」と題し、こちらは世界各国の服装の試着や楽器の演奏、遊びなどが体験できるよう準備されており、白衣を着た専門職員たちが常駐して子どもたちの教育にあたっている（図9）。民俗展示においては無形文化を扱うことが多いため、展示ケースで〈見る〉だけでなく〈体験〉できる普及教育活動が必要である。第三世代博物館まではこうして常

設展示室と体験学習室がまだ分かれているが、第四世代博物館では自然な形で両者が融合してゆくものと考えられる。歴博では歴史展示の中にそうした兆候がみられ、「寺小屋れきはく」と題された寺子屋風の常設展示室で、手習い帖の読み書きに挑戦したり蚕卵紙に商標印が押せるプログラムが用意されている。また、近世農村で使われた魚肥の一つであるメ粕展示において、実際にその臭いが嗅げるなど嗅覚に訴える展示も試みられている。こうした取組みは、第三世代から第四世代博物館へ向けて今後も引き続き充実してゆくものと期待される。

筆者は博物館を訪れると、必ずミュージアムレストランを見て回る。それは、博物館においてレストランは、食べられる展示室と考えているからである。博物館の施設である以上、レストランであろうと、そこは博物館情報を普及教育できる貴重な機会となる。もちろん第I章でみた通り、旧来の行政立博物館ではさまざま困難な問題もあることは承知しているが、サービスをキーワードとする第四世代博物館では、展示にあわせたメニューを開発するなど、今後改善されていくものと期待している¹⁶⁾。そうした思いをもって今回両館を訪ねてみたが、残念ながら福岡市博の「福岡市博物館喫茶室」では、福岡市らしい特色を持ったメニューはみられなかった。福岡には博多ラーメンや明太子、にわかせんべいなどの菓子、果物や駅弁などさまざまな郷土食があるから、今後の奮闘を期待したい。一方、歴博の「レストランさくら」では、ハンバーグセット

や山菜ピラフといった一般的なメニューのほかに、古代カレー（800円）・古代カツカレー（1,000円）・古代ハヤシライス（800円）・歴博ドッグ（600円）・歴博サラダ（シーザードレッシング、



図10 歴博ドッグ（国立歴史民俗博物館）入館証の右上に見えるのが歴博のシンボルマーク

500円)の5種が特色あるメニューとしてまとめられた。そこで古代ハヤシライスと歴博ドッグを注文してみると、前者はおそらく黒米を用いていることからそう名付けられたと考えられたが、後者はしばらく考えたものの、なぜこれが歴博ドッグなのかは分からなかった。おそらく、マスタードのかけかたが歴博のシンボルマークの形に似ているからではとも推測したが（図10）、もしそうであるならば、もう少し工夫ができそうである¹⁷⁾。2000年に開館した笠沙恵比寿（鹿児島県

南さつま市）にあるレストランは、地元の人々も普段食べている海の幸がふんだんに楽しめるとあって観光客の人気も高いが、食卓をみると地元の薩摩醤油と関東の江戸醤油が並べて置かれている。江戸醤油に比べて地元の醤油は随分甘いのだが、どのくらい甘いのか、食文化の違いを実際に食べて体感することができる。こうした工夫を、第四世代博物館はもっと仕掛けていくべきだろうと期待する。たとえば福岡市博では、近代史展示のなかに昭和初期のカフェを再現した空間があるが、中に入っても空間はがらんとして特別な工夫は今のところみられない¹⁸⁾。メニューやカトラリーの展示はあるので、せっかくならばこれらをそのまま福岡市博物館喫茶室としたほうが良いと思われる。メニューもすべて福岡に実際あったものを再現し、給仕の服装からカトラリーも調査して復原すれば、福岡の博物館だからこそできるレストランが誕生して話題を呼ぶだろう。

以上、いわゆる第四世代博物館と呼ばれる博物館像は如何にありえるか、最新の博物館リニューアル事例をみながら、運営と展示・映像技術・普及教育活動の3点からそれぞれ検討を行なった。この30年のうちに学問も変わり、また世間も変わってきた。博物館に求められる機能は保存・公開から参加・体験へ、そしてさらにサービスへと変わりつつある。残念ながらこれから益々文化財行政のための予算は縮小してゆくと思われるが、逆に博物館機能は全体として益々拡張し、地域の中へ広がってゆくだろう。収集保存・調査研究・普及教育のバランスをとりながら、縦割り展示を越え、無形文化を取り込み、適切な情報機器を駆使し、活動に多くの市民がインタラクティブに参加でき、モノそのもののみならず体験を通してより良い楽しみ（知的好奇心）やサービスを提供できる進化した「博情館」の姿が、第四世代博物館のありかたとして求められよう。

謝辞

本論は、筑紫女学園大学2013年度研究助成課題「第四世代博物館における新しい歴史民俗展示の研究」に基づく研究調査報告である。課題研究において、主に歴史展示については同大文学部時里奉明教授が担当し、民俗展示については梶原が担当した。その一部は2014年1月21日に筑紫女学園大学で開かれた特別研究会で発表した。研究助成頂いた筑紫女学園大学、時里教授をはじめ、国立歴史民俗博物館の葉山茂特任助教および総合研究大学院大学学融合推進センターの渡部鮎美特任助教、福岡市博物館の野島義敬学芸員など、お世話頂いた皆さまに対し厚く御礼申し上げます。

注

- 1) たとえば筆者は長崎県西彼杵郡の西海町・西彼町・大島町・崎戸町・大瀬戸町の5町が2005年に合併してできた西海市において、2011年4月より2013年3月までの2年間、西海市歴史民俗資料館のあり方等検討委員会の委員を務めたが、ここでも議論の契機は合併後の資料館再編問題だった。
- 2) 伊藤が亡くなった年が1991年であるにも関わらず、彼の主な著作の出版年が1991年および1993年なのは、彼の口述を病床で記録した関係者らが死後出版に寄与したからである。伊藤が後進たちに与えた博物館改革、特に市民参加の思想は偉大であった。
- 3) 梶原（2002）参照。
- 4) たとえば、新横浜のラーメン博物館や大阪府池田市にあるインスタントラーメン発明記念館、チルドレンズミュージアムとの関連においてはキッズプラザ大阪や千葉県船橋市のアンデルセン公園、また地域づくりとの関連においては三重県伊勢市のおかげ横丁や大分県豊後高田市の昭和の町、さらに地域まるごと博物館やエコミュージアムといった活動群が第四世代博物館のありかたとして俎上にあげられよう。
- 5) これはちょうど、生きた動物展示の博物館である動物園において、動物たちを1頭ずつコンクリート壁の檻に囲んで展示した単なる分類学的展示手法から、その動物たちが元来どのような自然環境に生きているのかをあわせて総合的に伝えようと、生態学的展示へ変化した経緯とも重なってみえる。
- 6) たとえば1992年開館の兵庫県立人と自然の博物館の展示室は、地球環境問題や都市化の問題にテーマを立てて構成されており、単に学問別であった旧来の展示室構成とは異なっている。また、2014年4月19日に三重県総合博物館として再オープンした三重県博でも、自然・人・モノ・文化を分けずにくべて一つの空間で展示しようと試みられた。
- 7) 高島は1974年生まれ、2010年の当選時は36歳だった。政令指定都市の市長としては神奈川県横浜市の中田宏（2002年の初当選時37歳）を抜く記録。ちなみに2014年現在、政令指定都市の市長では熊谷俊人千葉市長が当選時31歳で最年少。なお、高島による新しい福岡市政の事例として、カワイイ区という新仮想区の設定や、福岡市街を観光するオープントップバスの導入、福岡市屋台基本条例の制定などが知られる。

- 8) 公立博物館の教育委員会所管を定めた博物館法との兼ね合いが懸念されたが、これは現在、所轄長が経済観光文化局と教育委員会を兼任することで問題を回避しているようである。
- 9) たとえば経済観光文化局には同じく空港対策部も入っている。世界のハブとなる空港ではその国を代表する博物館がミュージアムショップを出店している姿がよくみられるが、これに倣い福岡市も福岡市博のミュージアムショップを福岡国際空港に出すなどの展開が可能となろう。
- 10) 1971年開館の宮崎県総合博物館において、1階で照葉樹の森やシカなど自然史展示であったものが、2階へ上がるとそのシカを古代人が槍で狙う歴史展示に変わる仕掛けがあるが、これなども展示連携の好例といえよう。
- 11) かつてはアップル社が開発したQuickTimeを用いた360度パノラマVR画像（QTVR）がよくみられた。これは各方向から撮影された複数の写真を繋ぎあわせ、様々な角度から資料を眺めることができたようにした技術である。初期のQTVRでは左右360度しか見られなかったが、QuickTime 5（2000年リリース）より天地360度も加えての全方向パノラマとなり、2次元画像を3次元空間のように見せることができた（VRとはヴァーチャルリアリティのことである）。しかし現在この技術はアップル社からサポートされなくなり、事実上終了している。
- 12) たとえば、宮崎県西都原市にある西都原考古博物館では、実際展示されている土器に、どのように文様が彫られているか手の動きをプロジェクションマッピングしているし、長崎県島原市にある雲仙岳災害記念館では、雲仙岳のジオラマの上に火砕流を同じくマッピングして示すなどの事例がみられる。
- 13) 拡張（augmented）という英語が用いられているのは、視角や聴覚など、人間の能力を「拡張」する技術ととらえられているからである。たとえば眼鏡店でメガネをかけなくてもかけた映像が見えたり、家具店で買おうとする家具を実際自分の部屋に置いた光景が見えるなどとよく紹介されるが、本来はもっと人間活動全般を拡張することが望まれている。つまり、日常生活でしているあらゆる人間の動作、たとえば照明を消すとか車を車庫に入れるなどの現実世界にコミットしてゆくものと期待されている。
- 14) 貸出料金は無料。貸出時に氏名と電話番号を記入して提出し、展示室を出て端末を返却したときに個人情報を書いた紙は返却される。ちなみに、ウェアラブルとは身につけることができるということであり、デバイスをかざす行為がどうしてもワンステップ余計な行動を強いるため、次世代コンピュータは徐々にウェアラブルへ向かうだろうとみられている。
- 15) これはかつてエコミュージアムと呼ばれ大変期待された活動であったが、残念ながら日本においてはあまり定着せず、博物館業界においてもこれを積極的に未来の博物館像として取り上げることはなかった。しかし近年世界規模の制度化のなかで、ユネスコが支援するジオパークやFAOが提唱するGIAHS（ジアス、日本では世界農業遺産と呼ばれる）などが新しいフィールドミュージアムとなる可能性が出てきている。詳しくは梶原（2014）参照。
- 16) これはなにも博物館側だけの努力ではなく、レストラン側の協力でも達成されよう。たとえばレストランの博物館への入店を公募する際、そうした対応を条件として求めることも考えられる。第四世

代博物館では、企画展にあわせた特別メニューを出すレストランもみられるようになってきた。たとえば2007年開館の国立新美術館に入ったレストラン「ブラスリー ポール・ポキューズ ミュゼ」では、2011年2月より同館がシュルレアリスム展を開催したのにあわせて、シュルレアリスム展特別コースや特別デザートが提供された。こうした期間限定のメニューを楽しみに博物館を再訪してもらうこともできるだろう。

17) 注文はしなかったが、もしその理由だとすれば、歴博サラダ（シーザードレッシング）もおそらく想像したものが出てくるのではないかと思われる。

18) 手延べ風のガラスの向こうにアロー号（現存する日本最古の国産車。1916年福岡で完成）や昭和の街並みが見える演出はよく工夫されている。

参考文献

一ノ瀬俊也「国立歴史民俗博物館における戦争展示をめぐる」(実教出版、2010年カ) www.jikkyo.co.jp/contents/download/1334277650

伊藤寿朗『ひらけ、博物館』岩波書店、1991年

伊藤寿朗『市民のための博物館』吉川弘文館、1993年

梅棹忠夫『情報の文明学』中公叢書、1988年

梶原宏之「笠沙恵比寿、あるいは博物館におけるサービスの問題」『九州民俗学』2号、pp.71-82、2002年

梶原宏之「類似制度との比較からみたジオパークと地理学の役割」『E-journal GEO』9-1号（日本地理学会）、pp.61-72、2014年

神戸芸術工科大学デザイン教育研究センター編『インタラクション・デザイン／RCAデザイン教育の現在』新宿書房、2012年

日経コミュニケーション編『ARのすべて—ケータイとネットを変える拡張現実』日経BP出版センター、2009年

(かじはら ひろゆき：阿蘇たにびと博物館長、人間文化研究所 客員研究員)